

私はニュータウンといわれるような所で育ったのですが、ニュータウンだけではなく、いわゆる集落が入り込んでいるような場所で、野原とか森などいろいろな環境がある場所でした。そういう場所で虫を取りに行くのですが、虫を捕まえようとすると虫がどこにいてかわからないといけないわけです。ある程度虫の気持ちになって探さないといけないんですね。この辺にいないんじゃないかということを想像するわけです。それが今考えたらある意味、自分にとっての一番最初の模型体験じゃないかと思っています。どういうことかという、虫のサイズは大体、人間の5分の1ぐらいになります。ということとは虫たちが草や木の枝の間にいるということを想像して、自分が50

分の1の小ささになって環境を見ていく。いま学生に建築というのは外から眺めるだけではないと教えているんですけどもそういう意味では50分の1の模型の中に入る訓練というのはその頃していたのではないかと最近思うようになってきました。もともと私は科学者に対する憧れが大きくて、何かを発見するとか、それがその後の人類にとって重要なものになるとか、そういうことに憧れを持っていました。昆虫の事とか生き物の世界のメカニズムを解き明かせる仕事ができたら、ものすごく面白いだろうなと漠然と思っていた、建築学科に入る直前まで理学部の生物学科とか農学部とか、生物の研究をする学科を考えていました。ただし、ある時、考えた

のは、数十年前に原子力や原子核の学科に入った人たちも、技術の問題とそれがどのように応用されるかという問題でわからないままそのコースに行く結構怖いものがあると考えました。そして、物のデザインを考えたり四角い空間ではないデザイン、近代建築ではないようなデザインの建築を作ることができるかもしれないと建築の世界に入りました。自然の持つ柔らかさというようなものをデザインしたいと考えていたので、建築は規則正しいデザインから学ぶというようなことがあるので、最初の頃は悩んだと言うかあまり出来の良い学生ではなかったですね。やりたい事はあるんだけどできないなど悩んでましたね。でも2年3年

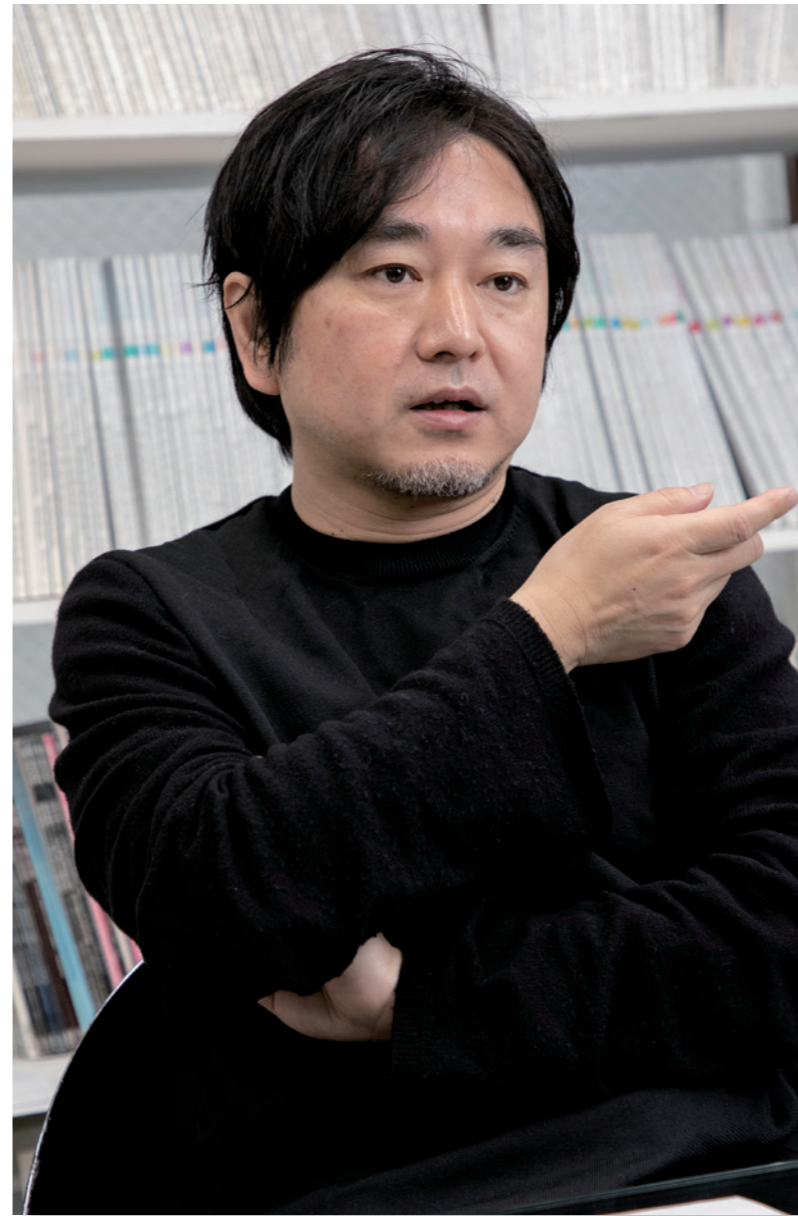
とやって、なんとなくこんな感じにならないのかというような雰囲気、少し掴むことができて、そこから割と評価していただけになり、自分でも設計の道に行くのだろうなと思えるようになりました。大学院の先生は竹山聖さんと、その上に川崎清さんの二人の研究室でした。川崎先生は京都駅や関空のコンペの審査員を務めるような偉い先生で、竹山先生は大学に赴任したばかりのまだ40代はじめぐらいで、色んな雑

幼年期の昆虫採集が、最初の模型体験となる

人間だけを特別視することなく

人も建築も生態系の一部として捉える

第一線で活躍する建築家との出会いが財産となった学生時代



平田 晃久

Akihisa HIRATA

太田市美術館・図書館で、2022年の日本建築学会賞を受賞した平屋晃久氏の提唱する建築の概念「からまりしろ」とはなにか？



CONTENTS

Front Line ■ 建築家インタビュー	2
平田 晃久	
Arrangement ■ 納入事例	8
oak港南品川	
Arrangement ■ 納入事例	10
複合施設 ハレミライ千日前	
Arrangement ■ 納入事例	12
東宝日比谷 プロムナードビル	
Arrangement ■ 納入事例	14
横浜コネクトスクエア	
Information ■ COMプレゼント	16

誌とかで活躍されていました。第一線でやられている方が身近にいるという環境が自分にとっては大きかったですね。

また、一番最初に教わった建築家は2年生のときの高松伸さんでした。高松さんの発表されている文章は非常に難解で作品も独特なのですが、説明を聞くと明快で明晰な人だということが分かって、メディアではわからない部分を感じられるという、そういう経験をさせていただきました。こういうふうな建築家になりたいと言いかこういう人がいる世界なんだなということがを感じることでできて、すごくよかったです。いま、私も京都大学で教えているんですけども、建築家として設計することだけを考えると負担でしかないのですけれど、そういう人がいて自分も今があるというおもしろいもあって、大学で教えています。

伊東事務所で体験した、世界で勝つということ

大学の時は京都だったので、東京の時間の流れ方ってだいぶ違って、伊東豊雄さんの事務所に入ってびっくりしました。どんどん動いていくので、



太田市美術館・図書館 ©Daici Anō

まったくついていけなくて霧の中をさまようように2年ぐらいは過ごしていました。最初はそんな風に役に立たなかったんですか、アルミ構造の住宅というのを担当していて、その住宅が3年ぐらいかかったのです。アルミ構造はまだ認められていなかったもので、実験もしなければいけないので、長い時間がかかりました。アルミ構造推進協議会という、メーカーがいっぱい集まって作っている団体の各社さんの協力のもと作っていたのですけれども、その人たちとコラボレーションするんです。普段、事務所にいると接することのない人たちとの共同作業をすることで、何かを作り上げることは結構楽しかったですね。

あと、伊東さんがアルミ構造だけの建築の展示会をするというので、いくつか案を出したんですけども、わりと主担当をして、さらに2年担当したのですが、2002年にパビリオンができて、5年かかりました。それまで全部アルミのプロジェクトで、このまま辞めるわけにはいかないと思って、トッズ表



樹屋本店 Photo: Nacasa & Partners

参道というイタリアの靴のブランドの旗艦店なのですが、それをやって辞めたのですが、その間にいろんなコンペをやらせていただいて、伊東さんが仙台メディアテークと言う意味を持つような建物をやられた後で、仙台後の新しい展開をどう考えていくかということで、伊東さんの下で考える機会を得ることができたのが、ものすごく大きなことでした。いくつかのコンペティションにも勝つことができ、世界の大きな流れの中で勝つということはどういったのが良かったのか、そういうことが実感できたのが良かったです。

「からまりしろ」を自身の建築のコンセプトに

独立後一番最初の作品は新潟県の枡屋本店という農機具メーカーのショールームです。伊東先生の事務所時代、トツツというお店を担当して、その中で面白いなと思ったのは成功されているお店のオーナーの方たちが、みんな共通して言っていることが、人間を人間

としてというよりは、動物的本能を持った存在として、この場所をこういう風に動かすとか、影になっている場所があればその後ろを見たいとか、直感的な見方をされているんですね。そして、現代建築がそういうことを考えてこなかったのではということから、動物的本能を持った人間というものに向けての建築を作りたいなと思ったのです。お店って全部見えてると興味を失うので、少し動く違うものが見えていくという世界を作りたいと5mゲリッドで壁を立て、それを斜めにカットしていくという、幻想的な感じになっていきます。立体的で形は直線的ですが体験としては曲線的な動きを感じることのできる場所を作るというのが自分にとって一番最初のプロジェクトになりました。

その後、東京の大塚に「Tree-ness House」という、住宅とギャラリーの複合ビルですが、これは一本の木みたいなものを建築で作れないかということも考えたものですけれども、コンクリートの箱を積んで大ま

あと、太田市美術館・図書館という建物がありまして、これは群馬県太田市にできた駅前にある施設なのですけれども、この太田市はスバルの企業城下町で、人口22万人で税収もあって潤っているはずなんですけれども、駅前には誰

も歩いていない。みんな車に乗って郊外のショッピングモールに行っている。それで駅前がどんどん死んでいく。これはもう街の人たちはみんなまがいなと思っていて、街の中心部に人が集まるきっかけを考えていました。

美術館・図書館の設計に街の人たちを巻き込む

かな構造体を作って、そこに窓を作るんですけども、窓がひだ状の出窓みたいになっていて、その窓に植物をからめるという3段階できているのです。これは、「からまりしろ」という言葉で自分の建築のコンセプトとして使っているんですけども、何かからまる「しろ」、つまり余地ということですけども、生物ではないものも含めた、自然の有機的な広がりの中に人間がいるというふうに、建築というものを、もうちょっと大きな概念の中に捉え直すことができないかという試みです。例えば海底にデコボコとした岩があって、そこに海藻がからまっている、その上に魚の卵がからまっているとします。魚の卵にとって海藻はからまりしろ、海藻にとって海底にある岩はからまりしろであり、ある種のインフラストラクチャーみたいなになっているということですね。そのように捉えると建築も自然界の色んなものも、世界の一部になるのですよね。この建物は魚の卵と海藻、海底の岩をそのまま建築にしたものなんですけれども、コンクリートの箱が海底の岩、ひだ状の出窓が海藻で、植物が魚の卵という感じ。それぞれ別のところから来たものがたまたま出会って、有機的に組み合わせられているという仮説です。イメージ的にはちようちよが花の間を飛んでいるという二次元的な空間です。幅6mぐらいの細長い敷地ですけども、小さいながらもモデルとして示せたので、自分にとっては大きな意味のある建物だと思っています。



Tree-ness House ©Vincent Hecht



台湾大学「藝文大樓」館内イメージ（黄翔龍建築師事務所と協働）

人々がどういふ本に惹きつけられているのかということも、本人の許可を取りログを取ることで、情報空間と実空間がからまりあうと思っていて、なにか目に見えない意識のからまりしろと、フィジカルなからまりしろがどのように関係するかということも、これからもっと面白いんじゃないかと思っています。

あと、昨年末に台湾大学の芸術大樓、いわば芸術センターといったところですが、ホールと博物館と美術館やカ



台湾大学「藝文大樓」外観イメージ（黄翔龍建築師事務所と協働）

フェ、宿泊施設などを一体化した複合施設のコンペに勝ちました。台湾大学は台湾の東大みたいなものです。その施設では大学と大学以外の人々を巻き込んだ活動が行われるという場所になります。そこでも意識のからまりしろというのがテーマになってくるのではないかと思っています。

身体の中からまりしろだけでなく意識のからまりしろもある

からまりしろというのは人間だけを特別視しないで、生物の一種だと考えた時に、からまる余地だという話をしましたけれども、第一義的には、色んな空間の中に部屋があつて、人間がその中で過ごしたくなるような雰囲気の様々な場所をもつてくるというのがひとつあるのですけれども、それらは人間のフィジカルな身体とのからまりし

ろを作っているのかなと思います。あと、人間の意識にとつてのからまりしろもあるのではないかと思うんです。いま、新潟の小千谷市でまた図書館をやつてるのですけれども、その場所から越後三山という美しい山々が見える特別なロケーションでして、元々は小千谷総合病院があつた場所です。病院なので3万人の人口の全ての人がそ

案としては、いくつかのコンクリートの箱を作って、この箱がそれぞれ全然違う特徴を持っているのですが、周りに道のような鉄骨のスロープを作つて、建物を歩いていると街中を歩くというような建物を提案して選ばれました。そして、太田の人たちが使つてくれな

一緒にやることで市民も巻き込まれていくし、実際に完成してからも市民の有志の人が、カフェを営業したり、年に何度かイベントをテラスの上でやっていたりします。建物を造ると言う有形の部分がありますが、それをどう使うかという無形の部分が重なり合つてど



小千谷市図書館等複合施設

こに来ていたことがあるはずで、同じ角度でその景色を見ていたはずで

書架が20万冊の図書館ですけれども、開架が10万で閉架が10万。開架のうち8万冊は書架に入つてるので、その限定された冊数の組み合わせを変えていくことができるのですね。そうすると本棚が動くよとの組み合わせが変わる。で、本棚は一台に数百冊入るわけですが、本と本とが出会つた雰囲気、島のようなものをその時々で作つていく、季節によって変わる、そういった書架になるわけですね。そして、小千谷の風景のなかで本も次々と変わっていく関係が見られるような場所を作つていくわけです。

機械式の仕組みを見せたらどうか
デンマークの図書館を訪れたおり、機械式で駐車場自体は全部地下にあるのですが、一階の車を預ける場所のインターフェイスがとてもかっこ良く、メカ部分が見えていても悪くなく、さらにスムーズに管理されており、心地よく入つていって、また出てくることに、すごく感心しました。機械でもデザインがしっかりしていて街の風景になつているという、そういうやり方もあるんじゃないかと。そういうデザインを考えてみたかどうかと思つたのがひとつと、あと、お金の関係もあるのですが、機械式駐車場をスケルトンにはできないのでしょうか。機械の世界では、どつちう仕組みになつているのか、だんだんわからなくなる中で、どうなつていのかが見えたらこれは非常に面白いと思つてます。

PROFILE

平田 晃久 Akihisa HIRATA

1971年、大阪府生まれ。97年、京都大学大学院工学研究科修了。伊東豊雄建築設計事務所勤務の後、2005年、平田晃久建築設計事務所設立。2015年、京都大学赴任。現在、京都大学教授。

主な受賞

2004年、SDレビュー朝倉賞 (House H)。2006年、SDレビュー入選 (House S)。2008年、第19回2007JIA新人賞 (樹屋本店)。2009年、ELLE DECO「Young Japanese Design Talent 2009」(animated knot)。2012年、第13回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展 金獅子賞 (協働受賞)。Elita Design Award (Photosynthesis)。2015年、LANXESS カラーコンクリートアワード受賞。2018年、村野藤吾賞 (太田市美術館・図書館)。BCS賞 (太田市美術館・図書館)。2022年、日本建築学会賞 (太田市美術館・図書館)